法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

編集記 ： 地球の方言は今

中本，正智

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
琉球の方言
(巻 / Volume)
14
(開始ページ / Start Page)
118
(終了ページ / End Page)
119
(発行年 / Year)
1990-03-08

Hosei University Repository

編 集 記

地球の方言は今

朝、寝床でテレビの音声を聞いていると、コザとか、方言とかが耳に入ったので、とび起きてテレビの前に坐った。ブラウン管に若い娘たちが写し出されている。次々にテレビから放出される情報をつなげてみるとこうだった。最近の沖縄の若者は方言を使わないばかりでなく、聞いても理解できない。コザの病院での話だが、この頃の若い看護婦は、お年寄りの患者が方言でうったえる病状が理解できずに即座に対応できない。病院側が苦慮したあげく、方言教室を開いて看護婦を教育することになった。ブラウン管の画面は、方言を話すお年寄りの顔が大写しになり、つぎに画面が替わって、方言教室で方言を勉強している若い看護婦たちが写し出された。年配の教師が方言を指導している。ニフェーデービル（有難うございます）、チューヤ　キーティンチ　ヤイビーン　ヤー（今日は良い天気ですね）、はい！ みんなで言ってみましょう、と声を揃えてやっている。いよいよ琉球語も滅亡の時がやって来たか、との思いが胸をしめつける。

伝統は、親から子へと生活の中で習得すべきものである。方言もしかり。世界の言語の実像はすべて方言なのだ。英語にしても、ドイツ語にしても、フランス語にしても、オランダ語にしても、もとはと言えば、方言であり、これを話す人たちが、自己の言語に誇りをもち、親から子へと伝え、これを話す人口を増やしてきたのである。

1989年という年は私にとって夏ぬきの年になった。　半年間、四季が逆さになっている南半球のオーストラリアへ出張したからである。東京で冬を過ごし、春を迎えたところでオーストラリアへ行ってみると、そこは冬の始まりであった。そして出張を済ませて夏を迎えるところで東京へ戻ってみると冬が始まるところであった。東京の春夏秋は、オーストラリアでは秋冬春であったから、この一年は夏ぬきで二度も冬の中を過ごしたことになる。期せずしてこのような芸当ができる地球は、やはり広いと言うべきであろう。

東京から9時間も南へ飛ぶと、そこはもうオーストラリアだ。時差わずか1，2時間。時差ボケがないかわりに、季節ボケには参った。オーストラリアにさしかかったかと思うと、赤茶けた砂漠の上を幾時間か飛んで、やっと大陸という実感が湧いてくる。今まで、四国のような形状をしているので、島かと思っていたのだが、そのイメージはけしとんだ。砂漠を過ぎると緑の多い渓谷が見えてきた。そこを飛行機からみると、平坦な大地が浸食されてできたことがよくわかる。しばらく行くと緑の平野が現われ、湖やら、杭を打ち込んだ牧場やらが現われた。気がつくと、機はかなりのところまで下降している。窓のむこうから赤瓦で整然と並んだ屋根が目にとび込んできた。街には大きなアーチ型の腕を伏せ

Hosei University Repository

たブリッジが見える。機内のアナウンスは、シドニー空港に着いたことを知らせている。シドニーは、砂漠の中のオアシス、いや地球に残された唯一のオアシスかも知れないと思った。

オーストラリアは大自然がそのまま残されているところが多い。その意味で最後のオアシスと思う。しかし、そこにも北半球からさまざまな問題を持ち込んでいた。人種問題、公害問題、産業問題等々。

オーストラリア原住民を日本でアボリジーニと呼ぶ人が多い。これは原住民の人たちの意識では蔑称となるのであえて呼ぶまい。ここでも原住民の人たちは、ちょうど日本列島のアイヌの人たちのように民族の滅亡にさらされている。オーストラリアを北部、中部、南部と分けるとすると、中部と南部では全滅してしまっている。かろうじて北部に残っているだけだ。中南部の原住民は離散し、自己の言語と文化を失っている。肌の色のほかは、すべて英語文化の中にとり込まれている。自己の言語と文化を失った民族は、滅亡のほかない。

オーストラリアは、豊かな大自然に恵まれているのに英国をはじめとする北半球の文化を追い求めているように見える。そこで、お世話くださったクラーク博士に言ってみた。

「オーストラリアの動物や植物をみなさい。カンガルーやコアラにしても、ボトルウオッシャーやジャカランダの花にしても、彼らは南半球に適合した独自の姿をしているではないか。人間たるもの、南半球に適合した姿と独自の文化を持ちえないはずはない。」と。こうあってはじめて地球最後のオアシスが実現されるだろう。クラーク博士は、青い眼で私を見つめて笑いを返してくれただけだった。

いつの時代でも、いずこの国でも、自己の言語と文化を失った民族は滅亡している。

わが琉球民族はどうだろうか。いや、日本民族であるからと自分に言い聞かせて安堵することもできなくはない。

さきに、ブラウン管に写ったお年寄りの顔と方言が、琉球民族を主張しているように思われ輝いてみえ、方言と独自の文化を失った若い看護婦たちの顔が、肌のつややかさにもかわらず、色あせてみえた。

沖文研では、「失われた村—— 小湾」を記録して復元するためのプロジェクトがスタートする。この時代に生きているわれわれの最低の責務と認識している。『小湾方言辞典』が完成すれば、『琉球語辞典』の貴重な一環をなすことであろう。

1990年3月8日

法政大学沖縄文化研究所所員

中本正智（東京都立大学教授）